

### <研究ノート>地図を使ったフィールドワーク 教育実践(1) : 想像地図散歩ワークショップ

梅崎, 修 / UMEZAKI, Osamu / IMAIZUMI, Takayuki / 今和泉,  
隆行

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies / 法政大  
学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

143

(終了ページ / End Page)

156

(発行年 / Year)

2016-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012784>

# 地図を使ったフィールドワーク教育実践(1)

## — 想像地図散歩ワークショップ —

地理人 今和泉 隆行

法政大学キャリアデザイン学部 教授 梅崎 修

---

### 1 はじめに

本稿の目的は、大学における地図を使ったフィールドワーク実習方法を開発し、その実践を紹介・検討することである。

フィールドワークに地図を使うこと自体は新しい試みではない。社会学や経営学などの社会科学分野、および民俗学や文化人類学などの人文科学分野において地域を対象としたフィールドワークを行う時に地図はよく使われる。そもそも人文地理学のフィールドワークでは、地図は必須の方法である。要するに地図は、地形、生活、産業などの地域情報が表現されたものなので、その読解は地域を対象にしたフィールドワークにとって欠かすことができない道具であり、素材であると言えよう。

ただし、フィールドワーク教育では、参与観察や現場密着の聞き取りが学生たちの関心を集める傾向があり、地図による事前の調査が疎かになるという教育上の課題があった。つまり、あまり準備をせずに調査地域に入ってしまう、地域の全体像が掴めていないので、結局地域を〈面〉としてではなく、〈点（取材先）〉として理解してしまうのである。特に大学外の短期滞在型の地域調査では、このような準備不足が聞き取りの未消化に繋がってしまう。結局のところ、インターネットで取材先を探し、取材先で聞き取りを行っても、それは取材者である学生と取材先を点と点で繋げただけである。実際の聞き取りを〈虫の目〉とするならば、地図の読解は〈鳥の目〉で地域を見ることである。局所と全体の二つの目から地域を見る訓練がフィールドワーク教育には必要と

言えよう。

では、教室で地図の読み方を教え、地域調査の前にその地域の地図を読んでおけば、フィールドワークは成功するのであろうか。地図の読み方を教えるだけならば、教育も容易であるが、その読みが実際の地域フィールドワークの効果を高めるかどうかは明らかではない。なぜなら、フィールドワーカーとして地図が読めるということは、ただ正確に地図の情報を入手できるということではないからである。フィールドワークにおいては、地図に描かれていない「社会」も地図の中から想像しながら読み解く必要がある。なお、大西・志村・田部・寺本（2005）は、大学生の地図好きと嫌いの発生要因を検討した上で、「生涯学習で地図や地図帳を活用するためのコンテンツはこれまであまり開発されておらず、このようなコンテンツの開発が今後、必要となるであろう」と記している。

社会認識における地図の意味を考察した松岡（2008）は、地図と想像力を関連づけて「地理的想像力」の重要性を主張している。この論文は、先行研究である若林幹夫（1995）『地図の想像力』における「地図は、個人が直接的に見晴らすことができない「社会」を全域的に可視化し、人々のあいだで伝達・共有される「社会的な」空間像」という指摘、そして厚東洋輔（1991）『社会認識と想像力』における「地図が社会認識の一つのモデル」という指摘を引き継ぎながら「個人と社会を繋ぐメディア」である地図に注目している。松岡（2008）によれば、地図には、社会の要請に従って地図がつけられるという側面と地図が社会をつくるという側面があり、後者は社会学的な地図観である。さらに松岡（2008）は、個人・地図・社会の関係性を結び付ける能力概念として「地理的想像力」の重要性を指摘した。グローバル化によって個人の取り巻く「社会」が大規模化・複雑化する中で、人々が「地理的想像力」を拡張し、「社会」を把握する必要性が高まっていること、またはコミュニティ再生が課題となっている「地域社会」再発見するために地図が役立っていることが考察されている。

しかし一方で松岡（2008）は、次のような問題を指摘している。電子メディアの発達によって地図に詳しきリアルが求められるようになり、局所的なエリアの実用的な情報提供の追及が進められると、地理的想像力は拡張されず、

<いま・ここ>ばかりにフォーカスする断片的・自己中心的な地理認識が生まれるとともに、想像力にもとづく面的な「社会」は不可視化されていく可能性がある。

以上のような地図をめぐる「地理的想像力」の考察を踏まえると、縮小していると思われる大学生たちの「地理的想像力」を再度拡張し、「社会」を面的に認識させる教育が求められていると言えよう。地図を読むとは、そこに描かれた人の営みや社会の仕組みを想像することであり、実際の訪問・聞き取りは、その想像された社会像を確認しつつ、時に違いを見つけ、再度、社会を想像しながら地図を読むという一連の相互的行為でなければならない。

このように「地理的想像力」を拡張することを目的とした場合、どのような方法があり得るであろうか。我々は、梅崎のフィールドワーク実習の中で今和泉が開発した地理ワークショップを大学生向けに導入し、その効果を考察してきた。地域フィールドワークの実習授業を行う大学は多いが、入学以前から地理的想像力が縮小しているために、その教育効果をあげられない授業も多いのではないか。このワークショップの試行は、地域フィールドワーク教育の授業改善に取り組む人たちにとって意義があると考ええる。

## 2 演習の概要

法政大学キャリアデザイン学部では、2年生の後期よりゼミナールがはじまる。梅崎ゼミも地域調査をゼミの主たる活動と考え、主に2年次の調査方法の習得、3年次の共同調査、4年次には卒論個人研究を行ってきた。3年次の共同調査は、東京地域のフィールドワークが中心であるが、夏休みには東京外の2泊3日の地方調査を続けている。なお、2005年度から2012年度まで続けていた大学近くの神楽坂における地域調査については、梅崎・佐藤・笥(2014)や梅崎(2015)でその活動をまとめた。

個人的な教育経験であるが、地域調査をはじめて気づいたことは、大学生たちが「地方」はもとより大学近辺の「東京」ですらよく理解していない事実であった。これは、東京出身の学生であっても同じで、自分の地元以外は(さらに地元であっても)、「よく知らない地域」なのである。むしろ、インターネットによって局所的な地理情報は得られるので、検索すれば、必要な地理情報が

〈点〉として入手できるが、学生たちの社会認識としては、時間軸や空間軸の中で地域が位置づけられていない。つまり、住宅地なのか商業地域なのか、また高級住宅街なのか下町なのかという地域の特徴が他地域の比較の上で把握されていない。

梅崎は、このような地域認識の基に、いきなり訪問・聞き取りをさせても十分な効果を上げていないことに気が付いた。それゆえに調査前に地域の歴史や地理を調べさせ、講義をしたのであるが、「どんな人が生活しているのだろう」「どこが盛り場で、なぜここに企業が集中しているのだろう」という人々のキャリアを想像力できる力が刺激されなければ、単なるお勉強になってしまう。そこで地図に優れた専門知識を持つ今和泉氏にワークショップ導入を依頼した。実施にあたっては、学生たちの出身地や現在の地理的知識、ワークショップ後の地域調査のスケジュールを情報共有し、大学向けのワークショップの内容を検討した。梅崎は、ワークショップ実施後の地域調査活動を観察し、学生たちにどのような変化が生まれたかを観察した。

### 3 ワークショップ

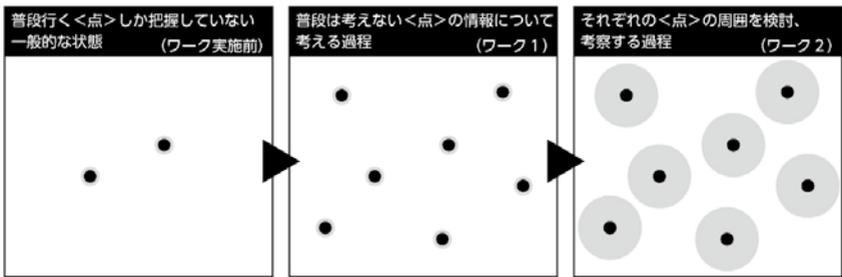
#### 3-1 ワークショップの目的

研究目的ではなく実用で地図を見る機会は、現在地から目的地までの経路を探す場合に限られる。紙地図が一般的だった時期は、地図上の広い面から現在地と目的地の二点、その経路を探すことになったが、ブラウザやアプリ上での無料地図サービスが発達してからは、この二点と最短経路も容易に検索できるようになった。より効率的に経路検索ができるようになった代わりに、広い〈面〉を見る機会を失った人も多い。

しかし、紙地図しかなかった世代が、〈面〉の把握が得意かと言うと、そうとも言い切れない。結局のところ、〈面〉的な把握は今も昔も、地図の読解に長けた一部の人が叶えており、範囲が広ければ広いほど、その把握は難しくなる。今和泉自身の経験や、数名へのヒアリングの結果、地図の読解に長けた人は、目的地以外の〈点〉を数多く見て、その〈点〉同士を絶えず比較したり、類似した〈点〉を見つれたりすることによって、結果的に〈面〉的な把握を叶えているのではないかと仮定した。

また、こうした<点>は、興味や関心があってこそ発見し、深められるが、そうでない場合は深められる以前に、発見することも難しい。中高校の学習における「暗記」では、多数の<点>を提示するが、その<点>を比較したり考察したり、新たな<点>の自発的な発見を促すことができない。<面>的な把握を叶える場合には、自身の日常生活や経験、関心に紐付いてこそ、自発的な興味や、自身の経験から推察される想像力を引き出すことができると仮定した。

そこで、ワークショッププログラムを設計するにあたっては、参加する学生がほぼ全員行った経験のある街で、自身の街の使い方や気づきを思い出しながら、そこから徐々に「普段は使わない使い方」「普段は行かない行先」について、日常目線で考える内容を検討した。



【図1】 点から面への学習過程（筆者作成）

左が一般的な<点>的な把握の状態である。何度も行ってきたことがある馴染みのある街でも、自分が行く目的地の<点>しか把握していない状態である。ワーク1では、これを「複数の点を把握している状態」にするため、普段は考えない<点>の情報について考える過程とし、続いてのワーク2は、それぞれの<点>の周囲を検討、考察する過程とした。ワーク1・2では普段馴染みがある街の都市地図を用いるが、実際のプログラムでは、その後ワーク3を設け、全く行ったことのない街の、同縮尺の都市地図を用意し、任意のペルソナで一日の日常生活を描いてもらう、という内容で、<面>的な把握の実践をってもらうこととした。

グレーで塗った部分の面積が徐々に増えていくが、全てが灰色に塗られた状

態が〈面〉的な把握ができていない状態である。一回の授業で面的な把握は完成しないとしても、〈点〉を深めて〈面〉を推察する視点や方法を持てば、その後〈面〉的な把握を叶えることも可能である。

こうした背景をふまえて、〈点〉的な把握の経験しかない人が〈面〉的な把握を身に付けられるプログラムを開発し、2014年10月9日に実施した。タイムスケジュールは以下の通りである。当日の参加者は約30人で、4～5人を1グループとして、合計6グループの編成とした。

- 0:00 今和泉自己紹介・フィールドワーク概要・ワーク説明
- 0:20 ワーク1…「その街の、多様な人々の動きを想像する」
- 0:35 ワーク1の結果発表・共有・ワーク2の説明
- 0:45 ワーク2…「実際の街の様子を想像、地図上でどのように描かれているかの観察」
- 1:00 ワーク2の結果発表・共有・ワーク3の説明
- 1:10 ワーク3…「知らない都市での、特定の人の、一日の日常を考えてみる」
- 1:40 ワーク3の結果発表・講評・まとめ

### 3-2 ワークショップの実施

#### (1) ワーク1…「その街の、多様な人々の動きを想像する」

用意したのは、昭文社の都市地図と、問題シートである。昭文社の都市地図を選んだ理由は、(1) 地形図に比べて、学生にとって見慣れた形式であること、(2) 一般的な街の利用、使い方の目的地が幅広く掲載され、そのための交通情報も詳しく掲載されているため、である。市販の都市地図は、多くの人が見るネット地図に近い形式でありながら、ネット地図よりも情報が多い。検索後に目的の情報を抽出すれば良いネット地図とは異なり、紙地図は、必要な情報は全て載せる必要があり、画面の解像度よりも印刷の解像度が高いため、より細やかな情報が記載されているためだ。今や、ネット地図もコンビニエンスストアやファストフード店のアイコンを載せているが、この様式を先んじて取っていたのは日本の都市地図である。また、各種商業施設や交通情報（鉄道の出入口情報から道路交通の交通規制まで）が掲載され、あらゆる一般的な用



【図2】新宿駅付近の都市地図（昭文社）

途に対応しているため、今回のワークには非常に適していた。

問題シートは、ワーク1からワーク3まで、6グループにそれぞれ異なる問題を記したカードである。

Question! @Shinjuku	<p>新宿の地図を見て、以下のことを考えましょう。</p> <p>久しぶりに会う友達と、おいしいお店を選んでゆっくり話したい。そんなお店はどのあたりでしょうか。</p>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
Question! @Shinjuku	<p>新宿の地図を見て、以下のことを考えましょう。</p> <p>映画を見た後、カラオケして、その後オールしたい。どのあたりを回っているでしょうか。</p>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
Question! @Shinjuku	<p>新宿の地図を見て、以下のことを考えましょう。</p> <p>服とデジカメとノートを買って簡単にゴハンを済ませて帰ります。どのあたりを回っているでしょうか。</p>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
Question! @Shinjuku	<p>新宿の地図を見て、以下のことを考えましょう。</p> <p>ビジネスマンが3時間近く打ち合わせをすることになりました。どのあたりのお店が良いでしょうか。</p>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
Question! @Shinjuku	<p>新宿の地図を見て、以下のことを考えましょう。</p> <p>優雅なマダムが買い物をしてゆっくりお茶を飲んで帰るなら、どのあたりが良いでしょうか。</p>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
Question! @Shinjuku	<p>新宿の地図を見て、以下のことを考えましょう。</p> <p>新宿にはあまり予備校がありません。予備校を作るならどのあたりが良いでしょうか。</p>	2014.10.08. HOSEI UNIV.

【図3】 ワーク1資料（筆者作成）

法政大学市ヶ谷キャンパスに通う学生にとって、馴染み深い大きな街といえは新宿だが、ワーク1は新宿の街に行く目的や回り方を考える内容である。「映画を見た後カラオケ」「友達とおいしいお店でゆっくり話したい」等、学生自身経験のありそうなものから、「ビジネスマンの打ち合わせ」「マダムの買い物」等、経験のない他者の想像まであり、無作為に各グループに問題が与えられる。各グループ15分で考え、その後発表し共有する。他のグループの検討結果、発表内容を聞くとより多くの「点」が得られる。

なかでも、ビジネスマンの打ち合わせに関しては、高級な喫茶店に行くという提案があった。ビジネスマンは学生とは圧倒的に異なる金銭力を持っているという仮定があったようだ。実際には安価なチェーン店で打ち合わせをするビジネスマンも多いが、正解を提示することよりも、普段は自身で体験しない利用、つまり他者の利用や目的を考えることが重要なのである。

(2) ワーク2…「実際の街の様子想像、地図上でどのように描かれているかの観察」

Thinking! @Map of City	<p>地図を読み解く</p> <p>駅から近い所と、遠い所は、どういう違いがあるか。 (それぞれの特徴、雰囲気の違いも)</p>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
Thinking! @Map of City	<p>地図を読み解く</p> <p>百貨店の近くと、映画館の近くは、どういう違いがあるか。 (それぞれの特徴、雰囲気の違いも)</p>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
Thinking! @Map of City	<p>地図を読み解く</p> <p>大通り沿いと、小道沿いの、 それぞれの特徴、雰囲気の違いは？</p>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
Thinking! @Map of City	<p>地図を読み解く</p> <p>ファッション店と、専門店（書店や電器店等）、 それぞれの立地の違いは？</p>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
Thinking! @Map of City	<p>地図を読み解く</p> <p>「人の多い場所」「何でも揃う場所」は、 地図上でどう描かれているか？</p>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
Thinking! @Map of City	<p>地図を読み解く</p> <p>「ゆっくりできそうなお店があるところ」は、 地図でどう描かれているか？</p>	2014.10.08. HOSEI UNIV.

【図4】 ワーク2資料（筆者作成）

ワーク1と同じく、6グループに無作為に異なる問題が与えられる形式である。〈点〉をより深く、〈点〉の周囲に視野を広げることで〈面〉的な把握を養うのがワーク2である。例えば「駅から近い所と、遠い所は、どういう違いがあるか」という問題は、駅から近い所と遠い所の2点の周辺、周囲を比較するというものである。この問題が配られたグループで「簡単ですよ、駅から近いところは何でもあって、遠くなるとなくなるんです」と言った学生がいたが、「本当に？駅から近い所にないものは？コンビニとかどう？」と返すと、「あ、コンビニ…ないっすね…」と考え始めた。駅から近いと何でもあるという固定観念を持ちがちだが、必ずしもそうとは言えず、ゼロベースで考え始めたのである。

「大通り沿いと、小道沿いの、それぞれの特徴、雰囲気の違い」について考えるグループも最初は苦戦していたが、地図上からコンビニエンスストアやファストフード店のアイコンが多く見られる大通り沿いと、アイコンのない小道沿いの違いに気づき、大通り沿いはチェーン店が多く、小道沿いは個人店が多いという特徴を導き出した。新宿の地図上で気づいた結果だが、これは行ったことのない都市の様子を推察する上でも参考になる視点である。

### (3) ワーク3…「知らない都市での、特定の人の、一日の日常を考えてみる」

ワーク1で〈点〉を増やし、ワーク2で〈点〉を広げて〈面〉にするトレーニングを行った。最後はワーク3、その視点で行ったことのない街の地図を見て、その街での日常を想像する、というものである。目的地が決まっておらず、目的地を地図上から探すことになるが、それには〈面〉的な把握を要する。鹿児島市は、今回参加した学生で出身者が誰もおらず、馴染みのある人もいない都市だったため、選定した。

ワーク3では、グループごとに異なる問題ではなく、自由選択式の同じ問題を与えている。サラリーマン、フリーのデザイナー、高校生、夫婦、老夫婦のどれかを選び、日常的な一日の流れを考えてみる、というワークである。

学生の大部分は高校生を選択したが、この中で唯一経験したことがあるものが「高校生」だから、とも考えられる。どのあたりに住み、どのあたりに通うか、その途中に何をするか、を全てゼロベースで考えることになり、移動距離

@Kagoshima Imagine!	鹿児島市の地図を見て、この街にいる1人の、 日常の一日、ストーリーを考えてみましょう。 「どこに住んでいて、どこに行つて、 何をしているのか?」	<ul style="list-style-type: none"> <li>サラリーマン</li> <li>フリーのデザイナー</li> <li>高校生</li> <li>主婦</li> <li>老夫婦</li> </ul>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
@Kagoshima Imagine!	鹿児島市の地図を見て、この街にいる1人の、 日常の一日、ストーリーを考えてみましょう。 「どこに住んでいて、どこに行つて、 何をしているのか?」	<ul style="list-style-type: none"> <li>サラリーマン</li> <li>フリーのデザイナー</li> <li>高校生</li> <li>主婦</li> <li>老夫婦</li> </ul>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
@Kagoshima Imagine!	鹿児島市の地図を見て、この街にいる1人の、 日常の一日、ストーリーを考えてみましょう。 「どこに住んでいて、どこに行つて、 何をしているのか?」	<ul style="list-style-type: none"> <li>サラリーマン</li> <li>フリーのデザイナー</li> <li>高校生</li> <li>主婦</li> <li>老夫婦</li> </ul>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
@Kagoshima Imagine!	鹿児島市の地図を見て、この街にいる1人の、 日常の一日、ストーリーを考えてみましょう。 「どこに住んでいて、どこに行つて、 何をしているのか?」	<ul style="list-style-type: none"> <li>サラリーマン</li> <li>フリーのデザイナー</li> <li>高校生</li> <li>主婦</li> <li>老夫婦</li> </ul>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
@Kagoshima Imagine!	鹿児島市の地図を見て、この街にいる1人の、 日常の一日、ストーリーを考えてみましょう。 「どこに住んでいて、どこに行つて、 何をしているのか?」	<ul style="list-style-type: none"> <li>サラリーマン</li> <li>フリーのデザイナー</li> <li>高校生</li> <li>主婦</li> <li>老夫婦</li> </ul>	2014.10.08. HOSEI UNIV.
@Kagoshima Imagine!	鹿児島市の地図を見て、この街にいる1人の、 日常の一日、ストーリーを考えてみましょう。 「どこに住んでいて、どこに行つて、 何をしているのか?」	<ul style="list-style-type: none"> <li>サラリーマン</li> <li>フリーのデザイナー</li> <li>高校生</li> <li>主婦</li> <li>老夫婦</li> </ul>	2014.10.08. HOSEI UNIV.

【図5】 ワーク3資料 (筆者作成)

に応じてその交通手段は、自転車なのか、バスなのか、も検討していた。サラリーマンを選択したグループは、「帰りに飲む場所」も的確に見つけており、地図上から居酒屋が集中するエリア、その世代に適した商業施設が集中するエリア、住宅地を読み取っていた。

ワーク1、ワーク2を経て、ワーク3では地図上から任意の地点の雰囲気や周辺の様子を想像することに障壁がなくなり、なにより自由に想像する試行錯誤のサイクルが速く回るようになったのが、最も大きな成果である。「ああでもない、こうでもない」と試みる想像と検証の連鎖こそ、〈面〉的把握ができる人の辿ってきた過程であり、その過程の発端をプログラム化できたと考えよう。学生からは、「街の見方が広がった。ストーリーに入り込み、行ったこと

ない街を身近に感じた。」「2時間も地図を見ると聞いて心配だったが、むしろ2時間では足りなかった。」という感想が得られた。

#### 4 おわりに

本稿では、地図を使ったフィールドワーク実習について、その目的や方法について紹介してきた。最後に、教室内のワークショップの終了後、その時点の2年生たちがその後3年生になってどのようなフィールドワークを行ったかを説明する。

2年後期から3年にかけて、梅崎ゼミでは、東京都内の公衆浴場（銭湯）の共同調査を行った。地域コミュニティの拠点、又は個人のキャリアを充実させるサードプレイスとして、街中の銭湯を調査し、その経営改革案を考えた。

まず、銭湯の立地を分析する際に地図は役に立った。どの地域に銭湯が集中しているかを検討した。それと同時に学生たちは銭湯利用者の生活を想像した。例えば、仕事帰りサラリーマンたちのちょい飲みの場所、高齢者と孫世代との世代間交流の場所として銭湯改革案は議論された。地域住民の生活の想像のために今回のワークショップは役立ったと言えよう。もちろん、実際の調査として銭湯に入浴し、経営者へのインタビューを行えば、想像とは異なる事実気付く。その時には再度地図を読みながら理解を深めた。

さらに夏休みには、2泊3日の地域合宿を奈良市で行った。はじめに地図を使った調査地域の想像を行い、その上で調査地を訪問した。奈良は観光地であるが、神社仏閣という名所中心ではなく、「ならまち・きたまち」という地元住民の生活の場を調査した。東京の調査に比べると短期集中であったが、短期であるからこそ事前の地図想像散歩が役立ったと言えよう。ここでも想像と実際の比較を通じて、インタビューによる局所の情報と地図による全体の情報を比較しながら理解を深めることができた。現在、大学生たちは、地域に対してきわめて少ない知識しか持っていない。いきなり地域フィールドワークをはじめても、前提となる知識が少ないので、そのフィールドワークの教育効果は小さい。今回のワークショップの方法はフィールドワーク教育の一つの有効な手法と考えられる。全国でフィールドワーク教育に取り組む多くの人たちにとって役に立つ情報になれば幸いである。

なお、我々は、その後も今回の実践とは異なる地図を使ったフィールドワーク教育を続けている。その報告については、今後の課題とする。

### [参考文献]

- 梅崎修・佐藤憲・寛隆太 (2014) 「(事例報告) オーラルヒストリーによる地域メディアの可能性－大学生によるタウン誌作成の実践を通じて」『地域イノベーション』第7号 pp.83-94.
- 梅崎修 (2015) 「「オーラルヒストリーを用いた教育実践」『日本オーラルヒストリー研究』第11号 pp.61-77.
- 大西宏治・志村喬・田部俊充・寺本潔 (2005) 「大学生の地図意識に見る地図好きと地図嫌いの発生要因」『地図』43 (Supplement), pp.52-53.
- 松岡慧祐 (2008) 「個人と社会をつなぐ地図：現代社会における地理的想像力の可能性」『フォーラム現代社会学』第7号 pp.100-113.
- 若林幹夫 (1995) 『地図の想像力』河出文庫
- 厚東洋輔 (1991) 『社会認識と想像力』ハーベスト社

**ABSTRACT****Report of Fieldwork Education Using  
Maps (1)  
-An Imaginary Walking Workshop on Maps**

Takayuki IMAIZUMI  
Osamu UMEZAKI

---

This paper introduces our workshop on fieldwork using maps and conducts discussions regarding this in the university. In fact, using maps for fieldwork is not a new attempt. However, some problems exist in using maps that students have not sufficiently investigated as they are only interested in participant observation and interview methods. Briefly, students would go into the field without much preparation, making it difficult for them to understand the essence of fieldwork. Therefore, we designed the workshop for building a strong “geographical imagination” and examined its effect.